慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本の人口の現在と将来
Sub Title	The population of Japan
Author	寺尾, 琢磨
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1969
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.62, No.8 (1969. 8) ,p.767(1)- 779(13)
JaLC DOI	10.14991/001.19690801-0001
Abstract	
Notes	寺尾琢磨教授退任記念特集号 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19690801-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本の人口の現在と将来

寺　尾　琢　磨

今日はわたしにとっては今学年の最終の講義であるばかりではなく，この住み慣れた三田の山の上における最後の講義でもあるわけで，鈍感なわたしもさすがに感慨無量なるものがあります。ことに，普段と違ってお歴々のご臨席まで賜わりまして，いささか心も動揺しております。もともと話はあまり上手でないので，その上そういうありさまでは十分なお話はできないかもしれません。一応の講義のノートは作ってまいりましたけれども，その点はご勘弁願いたいと思います。

この一年間「人口論特殊」という題のもとで，人口をめぐるさまざまの問題をいわばアット・ランダムに取り上げて，別に系統もなく，いわば思いつくままに，お話をしてまいりました。安川君がその担当講義でシステマティックな話をしてくださいますので，わたしは大変気易く，ほんとうに思いつきを並べたにすぎません。したがっていままでお話したことも，ほとんどなんらの体系もなかったことは，わたし自身がいちばん存じております。今日ここに「日本の人口の現在と将来」という題を一応掲げてはおきましたけれども，これからお話ししようとするのは，端的に申しますと，人口というものをどう考えたらいいか，大変抽象的なことになってしまうと思いますけれども，そういうことについて，わたしの考えを述べさせていただきたいのであります。

人口の理論が初めてシステマティックに述べられたのは，いうまでもなくマルサスによってでありますが，マルサスが「人口の原理」を書いた本来の目的は，人類，あるいは社会の完成という，大変抽象的な，あるいはメタフィジカルな目的は，はたして実現可能であるかどうか，これについての自分の考えを述べたのが「人口の原理」でありました。ところがその際，彼は人口と食糧との間のアンバランスを根拠として彼の理論を展開いたしました。人口と食糧との関係ということになれば，いうまでもなく一つの経済問題でありまして，したがって「人口論」がマルサスに始まるとすれば，人口論は最初から経済学的な性格をもって登場したということがいえるのであります。このマルサスの「人口論」は直ちにリカアドォによって継承され，彼の「地代論」，あるいは「賃金論」といった正統学派にとって最も基本的な理論の礎となったわけであります。したがって正統学

派の理論におきましては，「人口論」というものは明らかに経済学の一つの部分でありまして，これによって「人口論」は経済理論の中に十分の根を下ろしたということができるのであります。マルサスを反撃しようとしたマルクスは，いっそうこの点を押し進めていったといってよろしいでしょう。すなわち，彼は人口対食糧から導かれたマルサスの人口の絶対的過剰に対して，資本と雇用との関係から導かれた失業の問題，彼のいわゆる産業予備軍というものをもってマルサスに対抗したわけであります。失業の問題ならば，もとより徹頭徹尾，経済学的な性格のものでありまして，したがってマルサスにおいても，マルクスにおいても，人口論は完全に一つの経済体系の中に溶け込んでいたわけで，しかもこの場合の人口は常に過剰人口で，過剰人口の問題がすなわち人口の問題であったということができるのであります。

ところが近代経済学が成立いたしますと，人口というファクターは経済理論から追放されてしまったのであります。これを最も端的に表わしたのはジェヴォンズでありまして，彼はその「経済学の理論」の中で次のようにいっております。「自分はこの本の中で人口には触れなかった。これは自分が人口を軽視したからではない。それは，自分の考えでは経済学の直接の問題でないからだ。経済学の課題はなにかというと，与えられた土地，資源，労働力等々のもとにおいて生産物の効用を極大にするには労働力をどう使えばよいか，これを考えるのが経済学の直接の課題である。もし『人口』を導入すると，いままで与えられたものとしてあった，すなわち定数として置かれた人口というファクターがたちまち変数に変わってしまう。これでは問題が全然変わってしまうわけで，したがって自分としてはそういう立場はとらないのだ。」こういうことをいっておるのであります。かように経済学を純粋の静態論として取り扱えば，ジェヴォンズ的な考えはあたりまえでありまして，その後久しい間，経済学が静態論にとどまっておる間は，人口という要素は完全に経済学から駆逐されていたのであります。

ところがこの静態論がいつしか次第に動態論に移ってくる。それとともに人口は再び経済学の中に立ち返ってきたのであります。その最初の論者はケインズでありまして，彼は有効需要の理論を通じて人口のファクターを経済学に復帰させました。そしてケインズのこの考え方がハロッズ，ハンセンらに継承されて，ご承知の「長期停滞論」という理論ができ上がったわけであります。これらの理論においては，単に人口が取り扱われておるばかりでなく，人口のプラスの面が特に強調されておるのでありまして，それまでの「人口論」が人口のマイナス面を強調したのと著しい対照を示したのであります。

では「人口論」の主流は，過剰人口から過少人口に変わってきたのかといいますと，少なくともわたしの考えるところでは，「ノー」であります。その理由は，第一には「長期停滞論」は，まだ主として理論の世界の存在物で，現実の過少人口の上に立った具体的な議論ではないということであります。なるほど出生率は低下してきましたけれども，しかし，その出生率の低下は他方におい

て死亡率の低下によって相殺され，したがって人口の減少はさほど深刻に起こってはきておりません。ですから，いわば出生率のわずかな低下を誇張して将来に伸ばして，それによってでき上がった理論，すなわち多分に頭の中の理論であって，現実的要素を著しく欠いているといえると思うのであります。

第二には，現実の世界はご承知のとおり，いまだかつてない人口爆発の危機に見舞われております。今日，世界の三分の二以上を占める後進国の人口の爆発については，いままでの講義でもたびたび申しましたけれども，それは世界の一般的な平和を脅かすばかりでなく，その破滅さえも招きかねない非常に多くの危機をはらんでおります。この理論を従来の理論で処理しようとしても，どうしても困難である。そのために新しくいろいろな形で過剰人口の問題が議論されるようになったのであります。古くはヌルクセの理論をあげることができる。従来の少なくとも正統学派の理論に従いますと，消費を節約しなければ資本の蓄積は不可能である。これが正統学派の理論でありますが，ヌルクセは後進国における過剰人口そのものを利用することによって，消費を節約しないで資本の蓄積が可能であるという，大変目新しい理論を打ち出したのであります。もとよりこの理論には多くの欠陥がありまして，実際にこれがものをいっているとは思いませんけれども，しかし，とにかくいままでの理論ではどうにもならない多くの問題を提出したことは事実であります。

最近，ミルダールが「アジアのドラマ」と題する非常に大部の本を書きまして，新しい接近を試みております。ミルダールは結論としては，後進国における人口爆発の危険を強調して，これに対する具体的な対策として教育の振興と，家族計画の推進とをあげておりますが，しかしそこに至るプロセスにおきまして，従来の経済理論を痛烈に批判しておるのであります。このミルダールの本は諸君もご承知のとおり，今回新たにノーベル賞に経済学賞が設けられることになりまして，わたしの聞くところでは，このミルダールの著が第1回の受賞の最も有力な候補だとのことであります。いずれにしても，われわれの直面する人口の爆発は経済学として当然取り組まなければならない大きな問題で，したがって過剰人口を中心とする人口理論は，今後ますます必要になることはあっても，それがほかに中心を変えるということは当分考えられないと思うのであります。経済学が実践的な使命をもつとするならば，この問題に取り組むのは当然でありまして，わたしは今後の経済学がいっそうこういう問題を取り上げていくであろうと考えております。この意味で，「人口論」の課題は依然として，というよりはよりいっそう，過剰人口の解明に注がれていくであろうと思われます。

人口の問題は，いまいったとおり，理論の面でも，実際の面でも，中心は常に過剰人口の問題だということができます。もちろん過剰人口が「人口論」で扱うすべてでないことはいうまでもありません。さきほど述べました「長期停滞論」においては，逆の過少人口が問題とされており，現実の問題としても，たとえばわが国でも人口の老齢化とか，あるいは人口の都市集中といった問題が大きく取り上げられておりますが，しかしそれらが中心であろうとは考えられません。それらは重

要ではあるけれども，結局は減少が起こっておる場所に限定された問題に過ぎません。広く一般に人口の問題といえば，やはり世界的な過剰人口，これが問題の中心だと考えられるのであります。

わが国における人口問題の経過をふり返ってみますと，徳川時代，人口の過剰はいろいろな形で極めて困難な問題を提起しました。徳川時代はいわば過剰人口に対する恐怖の時代であったといってもさしつかえありません。明治にはいって急速な社会進歩のおかげで，この問題はしばらくは影をひそめておりました。過剰人口，というよりは人口問題そのものが影をひそめていたのでありますが，大正7年に至ってこれが再び姿を現わしました。それはいわゆる米騒動を契機として起こったのであります。そのころ突如食糧の不足が皆の目に明らかに映りまして，これを直ちに人口の過剰に結びつけてしまいました。食糧の不足はすなわち人口の過剰だと，非常に単純な関連づけをやったわけであります。そのときの騒ぎが大きかったために，政府はまもなく人口食糧問題調査会を作りまして，ここで初めて公式に過剰人口問題を取り上げたのであります。食糧問題はまもなく失業問題に変わってまいりました。この失業問題は，そのころ急に脚光を浴びはじめたマルクス学説と結合して，資本主義の本質に関する激しい論争に発展したのであります。

そのころの社会不安は帝国主義者によって，海外侵略の絶好の口実として利用されました。その結果が昭和6年に起こった満州事変であります。事実，太平洋戦争が終わったのちに開かれた極東軍事裁判の席上で，阿部大将が証言台に立ちまして，「満州事変の原因は国内の強大な人口圧力であった」と言明しておるのであります。しかしそのころの人口過剰なるものがはたして真実なものであったのかどうか，このことははなはだ疑問であります。米騒動によって惹き起こされた過剰人口論は，食糧の不足ということでありましたが，なぜ食糧が不足したかといえば，第一次大戦の最中に日本は連合国に対する軍事物資の供給国となり，このために急に工業化が非常なテンポで進みまして，そのために農業が著しく閑却された。その結果として米の産額が減ったわけであります。この食糧の不足に直面して政府は外米の輸入に踏み切りました。そして外米を輸入すると，たちまちこの食糧不足は解決し，したがって過剰人口も解決したわけです。要するに産業の構造が変わったために起こった一時的な結果であって，これから直ちに人口が過剰だという結論を出したのは，はなはだ早計であったのであります。また，失業についても，戦争が終われば急に経済活動が打撃を受けて，そのために失業が起こるのは当然でありまして，なにも日本に限られたことではありません。これを簡単にマルクスの産業予備軍説と結びつけて過剰人口の問題に発展させたのも，やはり一つの見当違いであったといわざるをえません。

ところが，今次の戦争が終わって，それから約 10 年間の日本の人口問題は，明らかに正真正銘の過剰人口の問題であったのであります。それは，一方では戦争によって経済基盤の大半を失って人口を扶養する力が急激になくなってしまった。他方，500 万にのぼる大量の引き揚げ者によって一挙に国の人口が膨張し，さらにベビー・ブームがあとを引き受けて，毎年 270～80 万にのぼる出

生が続き，このために，たださえ多過ぎた人口がいっそう多くなったわけであります。このために経済と人口とのバランスは完全にくずれたわけで，あのころとしては“あるのは人間ばかり”という状態で，これを過剰人口といわなければ，どこに過剰人口があるのかといわざるをえません。この危機に際して，われわれはいずれも経済復興に渾(こん)身の力を注ぐとともに，同時に出生を抑制する努力が始まったのであります。われわれの努力が，たまたまそのころ起こった朝鮮動乱に助けられて，いわゆる奇跡の復興を成し遂げたのであります。わずかの期間内に出生率は半減し，死亡率はその間に減少はしましたが，しかし年増加率はわずかに1％前後，いわゆる純再生産率は1ないしそれを割るという，非常に驚異的な結果をもたらしたのであります。数字的には確かに完全に安定した近代型ということができます。つい先日，あの世界的な人口学者のフィリップ・ハウザーさんが日本にやってこられまして，「日本の人口のあり方は理想的（アイディアル）だ」，こういう言葉を残していかれましたが，この言葉も他国の，特にアジアの諸国を見れば，必ずしもお世辞ではないと思われます。

だが，ここで一考を要することは，そもそも理想的な人口の型とはなにかということであります。いまいった，増加率が1％になったとか，あるいは純再生産率が1になったということは，人口の増加の状況を述べたものであって，人口のすでにある大きさにはなにも触れておらないのであります。われわれが人口を考える場合には，単に増加の状況だけでなく，その大きさをも問題にしなければならない。これに関しては増加率も純再生産率もなんらの解明も与えていません。では理想の人口とは何か。これはいうはやすくして，答えることは最もむずかしい難問中の難問であります。しかし思うに人口理論なるものが経済理論であるならば，やはり一般の経済問題と同じく経済原則によって解明されなければならない。答えは経済原則から与えられなければならない。いいかえると，利潤極大の原理から，この理想の人口をはじき出す必要があるということになります。この試みがいわゆる適度人口理論，あるいは最適人口の理論であります。これにしたがえば，最も適当な人口とは，与えられた諸条件のもとで，1人当たりの実質所得が極大になるような人口が理想の人口だというわけであります。なるほど，一つの企業をとってみますと，その場合の適度の人員，どれだけの人を雇用すればいいかは，この原則で十分にはじき出すことができるでしょう。しかし同じ筆法で一国の適度人口をはじき出すということは，実際の問題としては，ほとんど不可能であります。一国には幾多の産業があり，そのおのおのが無数の企業から成り立っている。それらを一括して共通的な限界生産力曲線と平均生産力曲線を求めなければ，適度人口理論における適度は算出できないわけでありますが，このことは，理論上ではできても，現実の問題としては不可能に近いでしょう。さらにこの理論においては，非現実的な仮定があまりにも多く含まれています。たとえば総人口と労働力人口との割合が一定であるとか，あるいは労働者各員の生産力は等しいとか，等

々の仮定を設けなければなりませんが，そのどれもが余りにも非現実的だというそしりを免れない。この理論が経済学の中に現われてから，すでに一世紀以上を経たのに目だった進展がないのも，結局はそのためでありましょう。卒直にいって，適度人口の測定については，今日のわれわれにはその手段の持ち合わせがないと答えるのが，いちばん正しいと思います。適度を判定できないとすれば，過剰も過少も云々することはできないわけであります。過剰とは適度以上であり，過少とは適度以下という意味でありますから，なによりも必要なのは適度を決めることです。標準そのものが決まらないのに，われわれは平気で過剰や過少を云々しているわけで，この点でわれわれはまことに頼りない状態にあるといわなければなりません。

人口を扱う場合にいちばんむずかしい問題は，ひと口に人口といっても，けっして同質の人間の集まりではないということであります。男があり，女があり，年齢もまちまち，健康や知能の点でも1人1人皆違っている。したがって一方の100万人と他方の100万人とは，まるで別のものだということであります。今日の日本を見ますと，一方には若年層が不足しているという事実がありますが，他方では中高年層は余っている。これもまた事実であります。こういう場合に全般として人口が多いのか，少ないのか，これを云々することは非常に困難であります。こう考えてきますと，ごく特定の人口層については，過剰とか過少とかをいうことはできるかもしれませんが，総人口についてはむずかしいといわなければなりません。

では，わが国の現在の1億という人口，また1％という増加率，これははたしていいか，悪いかということ，これもまた簡単には答えられないわけであります。しかし，理論的には判定は困難ですけれども，しかし最近の日本の社会・経済の進歩を見ますと，日本の人口の現状，すなわち人口の大きさや増加率は，たとえ理想的といえるかどうかは別としても，それとはなはだ遠いものであるとは考えられない。とにかく，人口の難問題に悩まされておるほかの国々と比べてみると，この点で日本の人口はまずもって満足すべき状態にあるのではないか，わたしは最近そう考えております。

さらに今後を考えますと，増加率はもっと減るかもしれない。そうなると，中高年層も，今度は逆に次第に産業に吸収される可能性も起こってくるでしょう。増加率が少なくなれば，労働力のより有効な利用が考えられるでしょう。また，若年層が次第に減少することも十分ありうることですが，しかしこれが結局は機械化を促進する有力な動機となる。あるいは，現在あまりにもむだに使われておる労働力をもっと合理的に使う。そういった契機に十分なりうると思う。人口の増加が少ないということ，これは当然覚悟していいことですが，これが結局，産業の近代化の最も力強い推進力になるのではないでしょうか。

わが国の人口が今後どのくらい増加していくか。これについてはいろいろな人がいろいろな根拠

に立って推計していますが，最もオーソリダティブな人口問題研究所の推定によると，昭和75年から80年ごろにかけて，日本の人口は1億2千2百万ぐらいになるだろう。しかしそこいらがピークで，それからは緩慢な減少に移るであろうということになっております。この人口の増加率の減退については，さきほど申しました「長期停滞論」のような，多分に悲観的な見解がむしろ今日，支配的に行なわれていますけれども，わたしは必ずしもそれに賛成するものではありません。産業技術は年とともに非常なテンポで進んでいる。技術の進歩，あるいは機械の進歩は，結局，人間労働はますます不要になるということであります。より少ない労働力で，より多く生産する，これが技術及び機械の進歩の結果でなくてはならない。また，人口の増加率の減退は一般商品に対する需要を減退させるだろうと考えられていますが，必ずしもそう単純なものとは考えられない。なるほど，非常に弾力性の小さい商品，必要品に対しての需要は，人口が減れば当然減ってまいるでしょうけれども，しかし弾力性の大きな商品に対しては必ずしもそうはいえないでしょう。そういう商品に対する需要は，人口の関数であるよりは，むしろ所得の関数である。そこで，経済そのものが進歩していけば，たとえ人口が少なくても，そのために需要が減退するわけではありません。

こう考えてきますと，必要なのは，人口の数ではなくて人口の質だということになる。別な言葉で申しますと，常により能率的な組織とか技術とかを実現していくところの人間能力の問題だということになるのであります。人間の数に頼る時代から，その能力に頼る時代に変わるということであって，現代はすでにそれに足を踏み込んでおります。そして，それは広い意味における教育の課題に外なりません。教育の重要性は単に一般の知能を高めるだけでなく，それが経済的な進歩にも直接つながるという意味において，たとえば今日，教育投資論といった新しい研究を刺激して，教育の経済的有利性というものが着々証明されていますから，教育は，今後いっそう尊重されることはあっても，その逆は考えられません。これによって人口の質が不断に向上していくと考えてよろしいだろうと思います。この条件が整えば，人口増加率は鈍化しても，経済は依然として発展するでありましょうし，その暁には，今度は人口の増加率が増加しても，その増加した人口を吸収することは容易だということになる。経済がある段階を越えて成長すると出生率が増大する傾きがあることは，今日のアメリカにおいてすでにその兆候が現われておりますし，日本においても幾分その兆候のようなものが現われております。この数年来，日本の出生率は停頓よりも，むしろ上向きの傾向をもっておるのでありまして，これは今日のすさまじい経済成長と無関係ではないはずであります。結局，経済がある段階を越えて成長すれば，子供というものが一種の耐久消費財として選択される。いままで家屋とかテレビとか車とかのために子供そのものが犠牲にされていた。ところがそういうものがすべて満足されたときには子供が選択される。これはきわめてありうることであります。また，経済的な見地に立つ限り，けっしてこれは非難されるべきことでもないわけで，そうい

う時代がくるかもしれないということです。こうなりますと，人口の増加もありうることであり，それが少しも経済的な発展と齟齬しない。そういう時代の到来も十分に考えられるでありましょう。

しかしながらこういった考え方は，すべて人口をば経済との関連においてとらえた場合のことであります。いいかえますと，人口をば経済発展の手段として眺めた場合のことであります。１人当たりの実質所得を極大ならしめる人口が理想的な人口だというのが，適度人口の教えるところで，これが最もよくいまいったことを表わしております。人口を勝手に動かしてみて，１人当たりの所得を極大ならしめる。この場合には人口は明らかに資本その他と並んで一つの手段として考えられるわけであります。だが問題は，はたしてこの見解で人口問題のすべてを処理することができるかどうかということであります。いうまでもなく人口は経済にとっては労働力であり，また購買力であります。この限りでは明らかに手段であります。労働力の所有者，購買力の所有者，これは明らかに手段として考えられている。だが，では経済とはいったいなにかということを考えてみますると，これは人間にとって一つの手段にすぎません。経済は人間の手段である。人口というのはその人間の，すなわち主体的人格の集まりである。そこで，手段として観念された人口の意味というものは，結局，主体としての人口との関連において評価されなければならないと思うのであります。これは別の言葉で申しますと，人口を手段として達成しようとする経済的極大というものが人間にとって望ましい最終の理想であるかどうかということであります。もっと平たくいえば，経済と福祉が一致するかどうかということにもなりましょう。

わたしはここで，かつてわたし自身が関係した人口問題審議会の答申を思い起こします。わたしが与っていた部会で「人口問題の見地から地域開発に関して留意すべき事項を問う」という諮問を厚生大臣から受けたとき，わたしたちは経済発展そのものの，あるいは地域開発そのものの重要性は十分に認識し，それを前提としながらも，その経済的効果を尊重するあまり，公害その他のマイナスの防止を怠ってはならない。こういう結論に到達しました。その際われわれは，経済開発と社会開発という二つが併存しなければならないということを強調したのであります。社会開発という文字が公式に使われたのはその答申書が最初でありまして，現在の佐藤首相がさっそくこの文字に飛びついて，これを自分の看板にしていることはご承知のとおりですが，われわれが経済を尊重するというのは，それが人間福祉の欠くべからざる基礎であるからであって，経済的基盤のないところに社会開発を望んでみたところで，これはできるはずがない。その意味で，人口を経済的な範疇として取り扱うことは，十分の意味をもっておるのであります。しかし同時に，経済が発展すれば必ず社会も開発される，あるいは福祉も増進する，こうは簡単にはいいきれません。なぜならば，経済発展のためには必ずなんらかの犠牲を必要といたします。この犠牲は，時には得るものよりも失うもののほうが大きいという結果になることがあります。大きな公害を起こし，そしてある程度

の経済的成果を収めたところで，差し引けばマイナスのほうが大きいというようなことはいくらでもありましょう。

こう考えてきますと，従来，人口理論で考えられた理想の人口なるものは，必ずしもほんとうの意味の理想人口とは限らない。両者は時に別ものではないかという感じがいたすのであります。経済の限りのない進歩は，今後ますます多くの人間を養うことができるでありましょうし，また，人口が増加することによってますます経済を拡充することも十分考えられる。しかしそれで問題はすべて解けたかといいますと，そこにやはり疑問が残るわけであります。これは別の言葉でいいますと，大変むずかしいことですが，いったい人間というものはなんのために生まれたのか，あるいは人間の幸福というものはいったいどこにあるのかといった，多分にメタフィジカルな問題になるわけであります。これはもちろん「人口論」のワクをはるかに越えた大きな普遍的な課題でありまして，浅学なわたしはこれに対してお答えする力はありません。しかしジョン・スチュアート・ミルの次の言葉が昔からわたしの頭の一隅にこびりついて離れないのであります。ミルはこんなことをいっております。「世の中にはまだ利用されていない土地はいくらでもある。だがそれが隅から隅まで耕されて，可憐な小鳥も野の花も姿を消してしまった世の中を想像すれば，いかに寂しいことであろうか。人間にとってなによりも必要なことは，時には独りでいて瞑想にふけることである。いつでもどこでも人と顔を合わせていなければならないのはなんと痛ましいことであろう。人口増加の余地はいくらでもあろうけれども，格別より良くもなくより幸福でもない人間で地球を満たそうとする考えほど愚かな考えはない。切羽詰まっていやでも人口の増加を止めなければならないような時期の来るはるか以前に，むだな前進をとどめるのがよろしい。」彼はこういうことをいっております。この言葉は経済学者の発言としてはきわめて異色的なもので，むしろ詩人の言葉といったほうがいいかもしれません。事実，島崎藤村はこううたっております。「わき目もふらで急ぎ行く，君の行く手はいずこぞや。月雪花のあるものを，とどまりたまえ旅人よ」。大変脱線してしまいましたけれども，結論的に申すとこういうことになると思うのであります。

今日の世界は二つに分かれている。一つは先進国であり，他方は後進国である。後進国における最大の問題は，さっきも述べたとおりその爆発的な人口増加である。なぜかような人口爆発が起こったかといえば，死亡率が減りながら，これに対応するような出生率の低下がないからである。なぜ出生率が低下しないのかといえば，人間としての生活に対する願望が足りないからです。いいかえれば，人間の集団ではなくて，いわば一つのアニマルな集団だからです。そんなことをいうと怒られるかもしれませんけれども。そこで後進国の人口の問題が解決されるためには，アニマルの集団から，それがほんとうの意味の人間の集団に変わってくることが先決問題であります。ミルダールが教育なるものをもって後進国問題，特にその人口問題の解決の大きなファクターとして取り上げたのも十分うなずけることであります。先進国においてはさきほどもいいましたとおり，一応，経

済原則に従ってむだな増加はやっておりませんけれども，しかしそのむだとか，あるいは有益性ということは，すべて経済的な問題としてとらえられている。いわば人間がエコノミック・アニマルとして存在しておるわけでありまして，さきほどのミルの理念によりますと，これはエコノミック・アニマルの世界をはるかに越えたものである。別の言葉で言えば，人間がエコノミック・アニマルから本来の意味の人間に立ち戻る。そうすればミルのいったような理想も達成されるかもしれない。人口問題の真の解決は，結局，そういう点に求められるのではないかと思うのでありますが，これはさきほどもいいましたとおり，経済学的に構成されてきた人口理論のワクをはるかに越えたものであって，どうもわれわれの手には及ばない大きな問題であります。結局わたしたち，少なくともわたし自身は，人口の問題をすべて経済の問題として理解してまいりましたし，今後もまたおそらくそうでしょうけれども，しかしその背後にこういった考えがどうしてもなければならないという気がしてなりません。これがわたしが長い間人口の問題を突っついて最後に到着した結論であります。わたしはこれでこの講義そのものは終わりにしたいと思いますが，まだ多少時間が残っておりますので，多少の回顧と，お別れの言葉を述べさせていただきたいと思います。

わたしが希望に胸をふくらませて初めて幻の門をくぐったのは，いまからちょうど 50 年前になります。大正8年，すなわちちょうど 50 年前です。その門をくぐったときに，ここが自分の生涯の大半を送る場所になろうとは夢にも思いませんでした。いつか半世紀たってしまって，今日ついに最後の講義をするようになったわけです。時がいかに早く過ぎてゆくか，自分ながら驚いております。私はさきほども塾監局の前に立って，図書館のあの大時計を眺めていました。ご承知のとおりあの文字盤には「Tempus fugit」という文字が書いてあります。「時は過ぎゆく」ということであります。いままではただしゃれたデザインだなと思って感心しておりましたが，さすがに今日はなにかわたしに語りかけておるような気がして，大変心打たれたのであります。ほんとうに時はまたたくまに過ぎていく。わたしが塾にはいって第一時間目のことをいまでも思い起こします。それは論理学の時間でした。柴田一能先生の時間でありました。大変変わったおもしろい先生でしたが，教壇に立ってしばらくわれわれをにらみつけ，さておもむろに大きな声で「神は万能」，しばらくして「柴田は一能」，さらにしばらく間をおいて「おまえたちは無能」(笑)。「なにも知らないおまえたちはせめてこの学校で送る数年間に多少の能は身につけていけ。一能までいかなくても半能ぐらいにはなって卒業しろ。」これが慶応にはいって教室で聞いた最初の言葉でありました。

さて，わたしこの塾に残りまして，勉強もしましたし，いろいろの役にもつきましたけれども，研究の上でも，また役職の上でも，ついに誇るべきものはなにもしないで終わってしまいました。考えてみれば，結局，一能をも身につけなかった，そういう感じを深くするのであります。しかしこれは自分に才がなかったからで，いまさらだれを恨むわけでもありません。諸君が年をとってふ

り返ってみたときに，なにか一つは誇るものをぜひもっていただきたいものであります。わたしが慶応へはいったのは，正直いって福沢先生に憧れたわけでもないし，塾の校風を慕ってはいったというわけでもない。まことにお恥ずかしい話ですが，理由は非常に簡単で，体格検査がなかったからでした。わたしは中学の卒業間際に病気をしまして2年間休んでしまった。大学にはいりたくても体格検査があればはねられるに決まっていると思って，どこか体格検査のない学校はないか，それを捜した。慶応はちょうど医学部ができた直後で準備が整わないために，その年に限って体格検査がなかった。これは天の与えとばかり慶応を受けてはいったわけです。まことに偶然というほかはない。いつかわたしの恩師の小泉先生に「おまえはどうしてはいった」と問われましたから，そのことをいったら，「情けないやつだね」(笑) と笑われました。自分の一生を決める大切なことが偶然によって決定されたということ，いまでも大変おもしろく思っております。

偶然といえば，わたしが「人口論」そのものに首を突っ込むにいたったのも自分の意志ではなくて，やはり偶然の作用によってでした。わたしが助手のときに，経済学部の先生たちが経済学の古典書を日本語に翻訳しようという計画を立てて，その翻訳すべき本としてアダム・スミスの「国富論」，リカアドォの「経済学及び課税の原理」，ジャン・バーチスト・セイの「経済学」，シィニョアの「経済学」と並んで，マルサスの「人口論」が取り上げられたのであります。いろいろな人がその翻訳に取りかかったのですが，取りかかるとみんなまもなく留学を命ぜられたり，病気になったり，いろんな理由でいつのまにかわたしにお鉢が回ってきてしまいました。わたしは「人口論」のじの字も知らなかった，興味もなかったのですけれども，とにかく先生から「おまえやれ」といわれてやむをえずマルサスに取り組みました。やっているうちに「人口論」というものは大変おもしろいものだと思いましたけれども，そのときでもまだこんなものが自分の一生つきまとうとは考えておりませんでした。昭和4年にヨーロッパに留学しまして，ベルリン大学に行ったのですが，そのときのわたしの先生がボルトキェビッチという大変偉い統計学者でした。ところがこの先生は「安定人口論」の先駆者の一人でもあり，人口についてたいへん詳しい方でありました。その先生に統計の理論とともに人口統計の分析の仕方などを教わったわけです。こんなことがきっかけとなって，いつのまにか人口というものが自分の専門の一つになってしまったのであります。わたしの一生につきまとう人口問題というものに関係したのも，いまいったように偶然のチャンスでした。わたしに大きな影響を与えたものは，ふり返ってみますと，自分が計画し，自分が望んでそうなったものはほとんどなくて，いずれもなんかの機会，偶然というものによって自分と結びついてしまったものが多いように思うのであります。今夜さしみを食ってやろうとか，風呂へはいっやろうというようなことですと，だれでも自分の計画どおりにやることができましょう。しかし自分はこういうことを生涯の仕事にしようとか，こういう学校へはいりたいというような場合，必ずしも自分の意志では動かない。ある学校へはいれたり，はいれなかったり，これも偶然の力が大きいし，会

社へはいりたいといっても，はいれるか，はいれないかわからない。自分の一生に影響を与えるような大きなことになればなるほど，自分の意志というものはあまり大きな意味をもたない。なにか偶然というものがいたずらをする。こういう例をわたしはいやというほど味わっております。ですから，いいかえてみますと，なにかうまくいっておってもそれに安心するのも早すぎるし，うまくいかないといって簡単に落胆する必要もない，そういうことになるだろうと思うのです。わたしは塾におきましては，小泉先生について理論経済学の勉強をし，そして助手になってから統計学をやれといわれて，その勉強のためにヨーロッパへも行きました。いろいろなものをかじりましたけれども，さっきもいったとおり，どれ一つとしてものにならなかったのは，まことに残念至極と申す外はありません。

長い50年にわたる塾の生活，ひと言でいってみれば，まことに楽しい生活でありました。まさによき時代の，よき大学に暮らし得たという喜びを深くするのであります。特に体育会のいろいろな部に関係しまして，自分で，たとえばスケートをやったり，スキーをやったり，車を走らしたり，いろんなことをやった。応援指導部の部長になって神宮で学生と一緒にワァワァ騒いで，友人達に「年がいもなくいい加減にやめろ」といわれたのも，いまは楽しい思い出であります。定年制というのも，実はこの制度が問題になったのはいまから10年も前で，しかもわたしが委員長となってその原案を作ったわけです。わたしが作ろうとしたのはもっと厳格なもので，もしそれがそのときに実行されておれば，わたしはもう5年ぐらい前にやめていなくてはならなかった。幸か不幸かこの定年制がいままで延びてしまったために，わたしもいままで生き長らえたわけです。しかし結局，定年制というものが塾の活気を取り戻す一つの有力なファクターになるだろうという意味で，今後この定年制が順調に塾で守られていくことをわたし自身も期待しておるわけであります。さきほど学部長からいわれましたとおり，わたしはこれを限りに少なくとも塾の教壇に立つことはもはやありません。大学でもそうですし，大学院でもまたそうです。一切教壇には立たない。世の中には物好きがたくさんおりまして，わたしのような者でもいいから俺の学校へ来ないか，なんていうやつがいますけれども，もう学校は慶応義塾だけでたくさんです。別に新しくほかの学校へ行こうという気はもっておりません。ただ幸い塾では「学校をやめても学校の研究施設は利用さしてやるから遠慮なく使え」，こういってくれますので，もはや教員でなくなりますけれども，暇があれば——始終暇だらけでしょうけれども(笑)——気が向けばいつでも三田へやってきて，そして，いままでのように，あるいはもっと一層勉強をしてみたいと思っております。いずれも中途半端な研究でしたから，これから十分な時間をかけて多少ともそれらをまとめてみたい，これがわたしの念願なのであります。

いま大学は日本中いたるところ大ゆれにゆれております。塾も一応治まったとはいってもまだいろいろくすぶっております。現に一昨日も三田の山に騒動があったそうですが，おそらく来年の安

保改定を控えて，さぞいろいろなむずかしい問題が起こるだろうと心配しております。もはやわたしにはなんの力もありません。すべて諸君の良識に待つばかり。塾歌にあるとおり，どうか諸君は力を合わせてこの学びの城を守っていただきたい。諸君はきっとそうやってくださるでありましょう。

いよいよ時間もなくなりましたから，この壇を下りなくてはなりませんけれども，一つ思い出すことがあります。わたしが塾で初めてフランス語を習ったときに，アルフォンス・ドーデという有名な作家のラ・デルニエル・ルソン，「最後の授業」という短い文章がありました。大変きれいな文章で，初めのほうはそのまま暗記しているぐらい印象の深い文章でした。フランスが普仏戦争で敗れて，アルサス，ローレンの二州をプロシヤに割譲してしまった。フランス語の教育が禁止されて，今日はその最後のフランス語の授業——国語ですね——，そのときのありさまを，そのときの生徒であった一人，おそらくこれがドーデだろうと思うのですが，それが30年のちに思い起こしながら書いたという文章だというのです。いよいよ最後だというので村の人達もその教室にやって来てうしろのほうにがんばっている。年を取った先生が普段と同じように静かにフランス語の講義をする。いつもは教室でガヤガヤ騒いだ生徒たちも，今日が最後と思うとなんかしんみりして，大変おとなしく聞き入っていた。そのときに，自分たちはフランス語というものがなんときれいな言葉であるかということをあらためて見直しました。そのうちにいよいよ時間も終わって，先生は静かに本を閉じて，そしてクルリと黒板に向かって大きく，ビーブ・ラ・フランス（フランス万歳）と書いて静かに出ていった。そういう文章でありました。

わたしは諸君に申し上げたいことはたくさんありますけれども，時間もありませんし，きりのないことでもあります。いまのドーデを真似て最後に諸君に，ビーブ・ラ・慶応（慶応万歳）と申し上げて諸君とお別れしたいと思います。どうも長々ありがとうございました。(拍手)

——以　上——